裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル片ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルヿヲ得

第二百七十一條　被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヿヲ得

第二百七十三條　公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル片ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲナシ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲナス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條　前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲナシ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲナス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲナス可シ

第二百七十五條　公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作リ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲナス可シ

第二百七十六條　裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲナス可カラス但辨論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヿヲ得

第二百七十七條　檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲナスヿヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲナスヿヲ得

第二百七十八條　裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲナスヿヲ得

此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條　檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所及ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲナスヿヲ得

豫審ヲナシタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲナシタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條　忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲナスヿヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條　忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲナスニハ第二百八十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條　忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變火厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條　公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條　裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヿヲ得

是等ノ書類ハ原被証人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條　調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ証人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スヿヲ得

第二百八十五條　豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出スヿヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル証人ノ陳述書ハ更ニ其証人ヲ呼出サヽル時証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ

陳述ヲ比較スヘキ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條　第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條　證人ハ互ニ言語ヲ接スヲ可カラス又陳述前辯論ニ立會フヲ可カラス

第二百八十九條　證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問スヲ可シ

一檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條　證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問スヲ可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條　證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問ス

ルヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必用ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問スヲ可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條　證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ現押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲナス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條　證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル片ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

第二百九十四條　前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヿ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル片ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其開廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條　證人呼出ニ應セサル片ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サヽル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條　證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル片ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヿヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條　第百九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條　被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條　被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ムヘシ

裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヿヲ得

第三百條　證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ニヨリ妨礙スルヿヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スコトヲ得但辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ナシテ發言セシムヽ可シ

第三百一條　檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條　辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル片ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決スヘシ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三條　民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルコトヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ナシテ其訴訟ニ關係セシムルコトヲ得若シ異議ノ申立アリタル片ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タス直チニ控訴又ハ上告ヲナスコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第三百四條　裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條　無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキコトヲ明示ス可シ

第三百六條　裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲スヘシ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スコトヲ得

第三百七條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

第三百八條　被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條　本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリ

タル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條　禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スヿヲ得ス

第三百十一條　勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條　訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルヿヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條　書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟

關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條　裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其抜書ヲ求ムルヿヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條　對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヿヲ得可キヿ及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヿヲ得可キヿ

及ビ其期限ヲ言渡書ニ記載スヘシ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條　書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作リ左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載スヘシ

一　裁判ヲ公行シタルヿ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヿ及ヒ其事由

二　被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三　證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヿ若シ宣誓ヲ爲サヽル時ハ其事由

四　原被ノ證據物件

五　辯論中異議ノ申立アリタルヿ後日ヲ期シテ申立ツヘキ事件ヲ申立タルヿ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六　辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタル事

第三百十八條　公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡

ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載スヘシ

辯論數日ニ渉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヿヲ記載スヘシ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其旨ヲ記載スヘシ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條　公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印スヘシ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載スヘシ

第三百二十條　裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存スヘシ

上訴アリタルトキハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フヘシ

第二章　違警罪公判

第三百二十一條　違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公判ヲ

受理ス

一檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條　呼出狀ニハ呼出ヲ受クヘキ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ記載スヘシ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サヽル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヿヲ得

第三百二十三條　呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條　違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スヿヲ得

第三百二十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二

十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出スヘシ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百二十六條　書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツヘシ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判スヘシ

第三百二十七條　違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地ヲ問フヘシ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀スヘシ

檢察官ハ被告事件ヲ陳述スヘシ

第三百二十八條　違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヤヲ訊問スヘシ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出スヘシ

第三百二十九條　被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出ス

ニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルヿヲ得

若シ白狀ナキトキハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アルトキハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條　呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスルトキハ言渡書ノ送達アリタルヨリ三日內ニ其申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條　裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヤヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタルトキハ書記ヨリ故障アリタルヿ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出狀ヲ送達スヘシ但シ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

又公判ニ附ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條　故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條ヨリ第三百卅條迄ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヿヲ得ス

第三百三十五條　犯罪ノ證憑充分ナラサルトキハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ無ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナルトキハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十七條　被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヿヲ得

第三百三十八條　違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヿヲ得

一　被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三　檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條　控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日內又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日內トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル片ハ書記ヨリ其旨ヲ對ト人ニ通知ス可シ

第三百四十條　訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條　控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條　控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヿヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヿヲ得

第三百四十三條　控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナ

ル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヿヲ得ス

第三百四十四條　控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲スヿ可シ被告人ノミ控訴ヲ爲シタル片ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヿヲ得ス

私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條　第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百四十六條　檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第三章　輕罪公判

第三百四十七條　輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出

二豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ

豫審件ヲ移スノ言渡

第三百四十八條　呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ

第三百四十九條　被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヿヲ得

第三百五十條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條　第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十二條　檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齡職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條　檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述スル可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述スル可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲スヿヲ得

第三百五十四條　罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲スヿヲ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサルトキハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條　闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條　闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左ノ場合ヲ除クノ外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲スヿヲ得

一　被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二　裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三　被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヿヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヿヲ知リタルヨリ三日內ニ故障ヲ爲スヿヲ得

第三百五十七條　裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲スヿヲ得但是等ノ處分ヲ爲スニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サルル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヿヲ得

第三百五十八條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條　被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲

シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條　被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サルトキハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人ハ勾留ヲ受ケサルトキハ勾引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條　被告事件豫審ヲ經タルトキハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條　會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證憑ヲ發見スルヿナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスルトキハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢察官ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條　前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スヿヲ得

又第三百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スヿヲ得

第三百六十四條　被告事件輕罪ニシテ且證憑充分ナルトキハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルヿヲ得

第三百六十五條　檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控罪スルヿヲ得

一檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタルトキ但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ受ケタル時

三民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條　控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日内ニ之ヲ爲スコトヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日内ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條　公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條　第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十九條　輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條　控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條　檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四章　重罪公判

第三百七十二條　重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一　豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二　控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條　重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作リ又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條　公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載スヘシ

一　被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模樣

二　被告人ノ氏名年齡身分職業住所出生ノ地

三　豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四　罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條　公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載スヘカラス

第三百七十六條　重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スヿヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヿヲ得

第三百七十七條　書記ハ被告人出廷ヨリ少タトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達スヘシ

被告人數名アル片ハ各別ニ其謄本ヲ送達スヘシ

第三百七十八條　重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル片ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所ノ屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ片ハ代言人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヿヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯護ニ取掛ルヿヲ得ス

第三百七十九條　辯護人差支アル片若クハ辯護人ヨリ之ヲ改選スヘキ正當ノ事由ヲ申立タル片被告人自ラ辯護人ヲ選任スルヿニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル片ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條　書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヿヲ記載スル可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル片ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載スル可シ

第三百八十一條　辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル片ハ刑ノ言渡ノ効ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヿアリー雖モ辯論ニ關係ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヿヲ得ス

第三百八十二條　辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接見スルヿヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄寫スルヿヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見スルヿヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受クル地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル片ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條　檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條　前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヿヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヿヲ申立タル片ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヿヲ得

第三百八十五條　證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條　裁判長ハ開廷ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廷ス可キヿヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條　裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル

時ハ重罪裁判所又ハ在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヿヲ得

第三百八十八條　裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條　書記ハ呼出シタル証人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ

其呼立ニ應シタル証人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ呼入ル可シ

第三百九十條　裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意シテ聽ク可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條　裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サンスル時ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サヽル可カラス

第三百九十二條　裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反証ヲ差出スヲ得可キヿヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條　裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條　証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ

但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヿヲ又証人ヲシテ他ノ証人ト對質セシムルヿヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヿヲ得

第三百九十五條　裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲナスヿヲ得サル可シト恩料シタル時

檢察官民事原告人ハ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其証人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルヿヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シムル可シ

第三百九十六條　裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルヿヲ言渡ス可シ

第三百九十七條　檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルヿヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムル可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條　辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヿヲ辯論スルヿヲ得

第三百九十九條　前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人

ハ答辯ヲ爲スヿヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヿヲ得但閉廷前之ヲ判決ス可シ

第四百條　被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘシ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條　犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲナス可シ

第四百二條　辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ナシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條　檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百四條　闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被証人ノ陳述ヲ聽クヿヲ可シ

檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述スヿヲ可シ

第四百五條　闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達スヿヲ得

第四百六條　闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヿヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百七條　闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヿヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日內ニ故障ヲ爲スヿヲ可シ

第四百八條　故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲナスヿヲ可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理スヿヲ可キヤ否ヤヲ判決スヿヲ可シ

其故障ヲ受理スヿヲ可キ者ト判決シタル片ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲スヿヲ可シ

第四百九條　闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スヿヲ可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理スヿヲ可キ者ト判決シタル片ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受クヿヲ可キノ言渡ヲ爲スヿヲ可シ

第五編　大審院ノ職務

第一章　上告

第四百十條　檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左

ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヿヲ得
一法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時
二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時
三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時
四法律ニ於テ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無效ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時
五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時
六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時
七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヿヲ得ヘキ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時
八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時
九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬

アル時
十擬律ノ錯誤アル時
十一越權ノ處分アル時

第四百十一條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヿ又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヿヲ得ス

第四百十二條　民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十三條　上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百十四條　上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條　豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタルトキハ勾

留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條　上告ヲナサントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條　上告申立人ハ其申立ヲナシタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條　對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辨書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辨書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條　檢察官ヨリ差出スヘキ上告趣意書又ハ答辨書ハ二通ヲ作リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達スヘシ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出スヘキ上告趣意書

又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條　書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後遠ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出スヘシ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢事長ニ差出シ且意見アルトキハ之ヲ添フヘシ

檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記スヘキヲ院長ニ請求スヘシ

第四百二十一條　上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ルヘキ者トシテ上告ヲナシタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサルトキハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任スヘシ

第四百二十三條　院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命スヘシ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ルヘシ但自己ノ

意見ヲ付ス可カラス

第四百二十三條　上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出スヤテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヿヲ得

專任判事告書ヲ差出シタル後辨明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條　書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報告ス可シ

第四百二十五條　開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辨明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條　上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サヽルヿハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條　大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスルヿハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條　擬律ノ錯誤若シハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヿニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヿナシ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條　豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヿアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサヽル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナシ止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條　豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條　大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ

爲サシムヘシ

第四百三十三條　大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示スヘシ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移スヘシ

第四百三十四條　法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヿヲ得

第四百三十五條　法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲナスヿヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲナスヘシ

第四百三十六條　左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヿヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲナサヽル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條　哀訴ヲナサントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲナスヘシ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出スヘシ

第四百三十八條　大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲナスヘシ

大審院ニ於テハ通常上告ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章　再審ノ訴

第四百三十九條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲナスヿヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲナスヿヲ得ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當

リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ証書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ僞造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

第四百四十條　再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十二條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其願意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ証憑書類ニ意見ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條　大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條　大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲナス可シ

第四百四十五條　大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時

ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲナスヘキヿヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲナス可シ

第四百四十六條　死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルヿヲ認メタル片ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヿナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條　再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル片ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ掲示公告ス可シ

第三章　裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條　通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ變事ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヿ能ハサル片ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲナスヿヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲナスヿヲ得

第四百四十九條　裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲナサントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條　大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示スヘシ

第四章　公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條　犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル片ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十二條　公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲナス可シ

第四百五十三條　大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クヿナク遽ニ前條ノ訴ヲ判決スヘシ

第四百五十四條　被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模樣ニ因

リ裁判ノ公平ヲ維持スルヿ能ハサルノ恐アル片ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヿヲ得

第四百五十五條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヿヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル片ハ前項ノ訴ヲ爲スヿヲ得ス

第四百五十六條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日內ニ答辨書ヲ差出スヿヲ得

第四百五十七條　大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條　嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル片ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第四百五十九條　重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條　死刑ノ言渡確定シタル片ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日內ニ其執行ヲナス可シ

第四百六十一條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條　刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞及ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條　死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作リ刑ノ

執行規則ニ從ヒ立會ヲナシタル官吏ト共ニ署名捺印スヘシ
其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條　裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル片ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作リ左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲナシタル時ハ其執行ヲナシタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地
二罪名刑名
三再犯
四裁判言渡ヲ爲シタル年月日
五對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條　既決犯罪表ハ二通ヲ作リ一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ
違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作リ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル片ハ刑ノ言渡ヲナシタル裁判所ニ於テ之ヲ判決スヘシ

第四百六十七條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル片ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致スヘシ
裁判所ニ於テ本犯ナルヿヲ認定スルヿ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ証人ヲ呼出スヿヲ得

第四百六十八條　前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲナス可シ
但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條　賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章　復權

第四百七十條　復權ノ期ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲナス可シ

復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出スヘシ

第四百七十一條　復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フヘシ

一　裁判言渡書ノ謄本

二　主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヿヲ証明スル書類

三　假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ証書

四　賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ証書

五　過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條　檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出スヘシ

第四百七十三條　檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出スヘシ

第四百七十四條　司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許スヘキ者ト認メタルトキハ速ニ上奏スヘシ

第四百七十五條　勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スヿヲ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條　復權ノ裁可アリタルトキハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致スヘシ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付スヘシ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入スヘシ

第三章　特赦

第四百七十七條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヿヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由スヘシ但檢察官ハ意見書ヲ添フヘシ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上

奏スヘシ

第四百七十八條　司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニナモ特赦ノ申立ヲナスヿヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條　特赦ノ申立棄却アリタリ片ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲナシタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スヘシ

第四百八十條　特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致スヘシ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

○太政官第四拾四號御布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

○同第四拾三號御布告

公訴私訴ニ係ル控訴上告及ヒ證人呼出費用等ノ儀當分左ノ通相定候條此旨布告候事

刑事裁判所ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係ハヨリ控訴又ハ上告ヲ爲ス者アル片ハ原裁判所ニ於テ其訴訟費用ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ若シ豫納スルヿ能ハサル片ハ控訴又ハ上告ヲナスヲ許サス

豫審者ハ公判ニ付証人ヲ呼出サントスル者アル時ハ裁判所ニ於テ其旅費日當等ノ金額ヲ算定シテ之ヲ豫納セシムヘシ

若シ被告人旅費日當ヲ豫納スルノ資力ナキ時ハ治罪法第七拾條ノ制限ニ從ヒ裁判所ニ於テ其費用ヲ立替置クヘシ

同第四拾六號御布告

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタルトキハ其被告人逃捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト相定候事

治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其擧動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルヿヲ得

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅捜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又タ旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラス捜索致シ苦シカラス

治罪法第百七十三條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヿヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヿヲ得

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヿヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

○第四拾七號御布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條　被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條　責付中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條　被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナシテ出廷セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○同第四十八號布告

刑法治罪法中違警罪裁判所ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

○同第五拾三號布告

各裁判所ノ位置及ビ管轄ノ區畫別表ノ通改正シ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

○同第五十四号布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ內輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヿヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷內治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

○同第五十五号布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ該條此旨布告候事

○同第五拾六號御布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所（即チ違警罪裁判所一始審裁判所（即チ輕罪裁判所）ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○同第五拾七號御布告

伊豆七嶋裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及解勸幷ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日施行候條此旨布告候事

○同第五十九号御布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ猶期訊問限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

○同第八十二号御達

司法官吏ヨリ巡査及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條　裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物

件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル件ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵卒ヲ使用スルヿヲ得

但時機緊急ナル時ニ直チニ之ヲ使用スルヿヲ得

第二條　前條ノ場合ニ於テ緊急重要ニ渉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヿヲ得

同第八拾六號御達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡査爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡査或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公廷ニ入リ看護セシムヘシ此旨相達候事

明治十六年十月廿二日御届
明治十七年三月廿五日出版
定價二十錢

編輯兼出版人　滋賀縣平民　内藤久人
京都府上京區第卅組下本能寺前町卅六番戸寄留

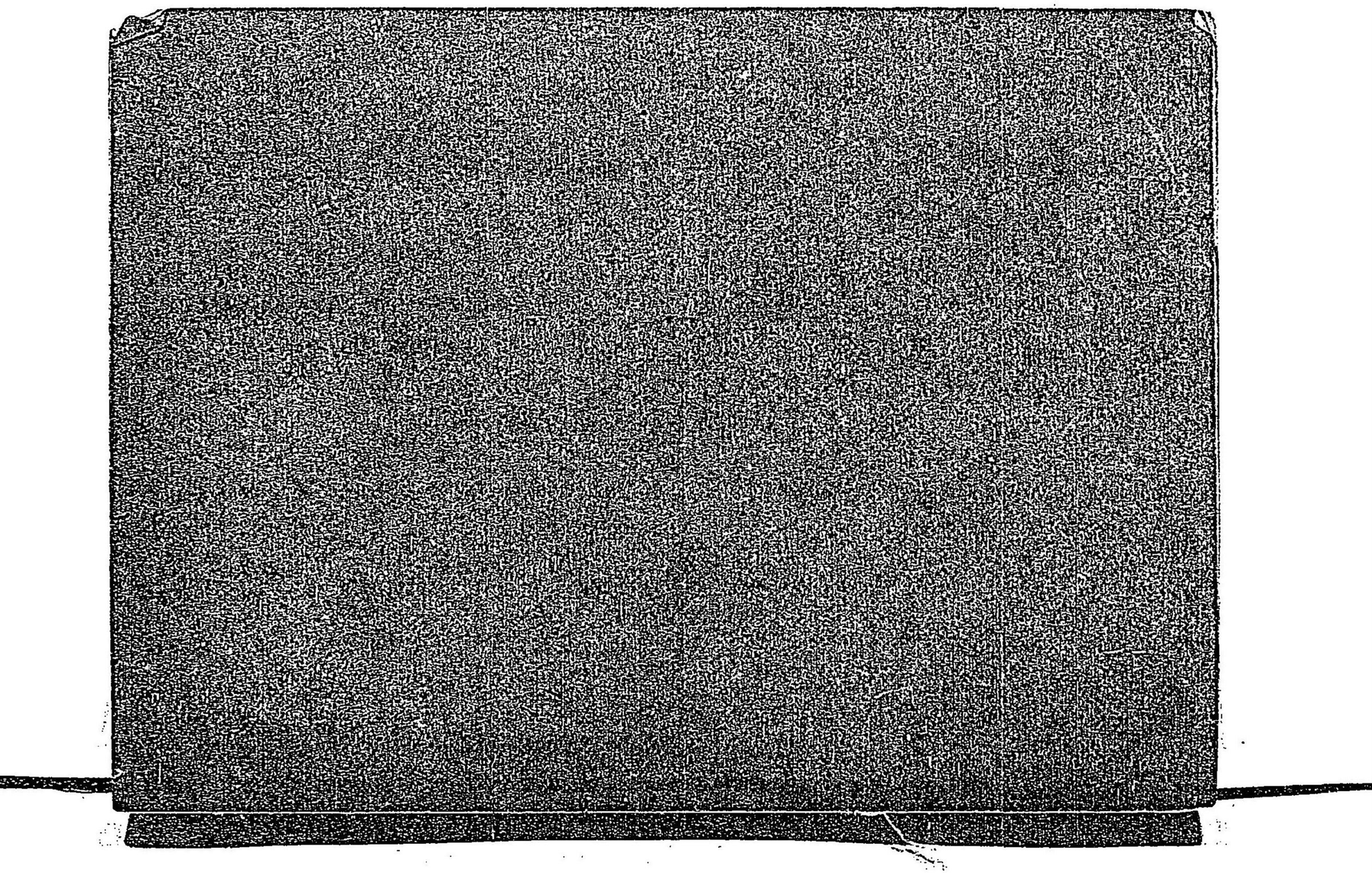
發兌元　大坂心齋橋北詰拾五番地　駿々堂書店
京都寺町通御池下　駿々堂書店
同

定價壹四三十錢

西洋綴黒背皮金文字入頗美本○紙數千五十ページ○定價壹圓卅錢○全國郵送料廿六錢○既出版

此書ハ明治元年ヨリ同十六年十二月廿八日徴兵令改正ニ至ル迄凡十六ケ年間ノ頒布ニ係ハル各條例并令規、諸規則、訴訟法并訴答文例、戸籍法、願届ノ五法則ヲ部門ヲ剖ヲ類聚編纂セシモノニシテ日本人民ニ其法律規則カ命スル所ノ針路ヲ分明ニ案内スルコト磁石ノ北方ヲ示スカ如キ官民必携ノ良書ナリ

右ハ二千五百部ヲ限リ豫約出版致候處幸ニ江湖ノ賛成ヲ得テ既ニ滿數相成申候得共未ダ各地方ヨリ陸續ノ御申込絶ヘス候ニ付今般御改正ノ徴兵令ヲ増加シ更ニ又五百部ヲ増刷仕既ニ製本出來致候五月三十日迄ニ御注文ノ諸君ヘハ一部九十錢ノ低價ヲ以テ御注文有之次第卽時御送本可仕候間御望ノ諸君ハ至急御注文ノ程奉希上候也



特71
783

刑法
治罪法
附則
合冊一

明治十七年三月出版

駸々堂本店發兌

301366-001-8

特71－783

刑法 刑法附則, 治罪法 治罪法追告

内藤久人／編

M17. 3

BBP－0001